

岐阜県セラミックス研究所外部評価結果

1 外部評価委員

| | | |
|-----|-------|---|
| 委員長 | 澤岡 昭 | 大同大学 学長 |
| 委員 | 藤 正督 | 国立大学法人 名古屋工業大学 先進セラミックス研究センター センター長 |
| 委員 | 杉山 豊彦 | 独立行政法人 産業技術総合研究所 中部センター セラミックス応用部材研究グループ グループ長 |
| 委員 | 河口 一 | 岐阜県陶磁器工業協同組合連合会理事長 山喜製陶株式会社 代表取締役社長 |
| 委員 | 小川 計爾 | 岐阜県窯業原料協同組合理事長 (株)丸美陶料 代表取締役社長 |

2 実施日・場所

日時：平成 25 年 1 月 18 日（金）13：30～16：00

場所：セラミックス研究所 講堂

3 委員会進行

| | | |
|------|-------------|------------------------|
| 開 会 | 13：30～13：40 | 挨拶、委員紹介、資料確認等。 |
| 概要説明 | 13：40～14：10 | 研究所の取り組みについて説明。 |
| 所内見学 | 14：10～15：00 | 所内案内。研究課題について担当研究員が説明。 |
| 休 憩 | 15：00～15：10 | |
| 意見交換 | 15：10～16：00 | |
| 閉 会 | 16：00 | |

4 外部評価資料

→ セラミックス研究所外部評価資料参照

5 外部評価結果

| | A 委員 | B 委員 | C 委員 | D 委員 | E 委員 | 平均 |
|-------------|------|------|------|------|------|------|
| 研究課題の設定 | 3 | 3 | 5 | 2 | 3 | 3. 2 |
| 研究体制 | 4 | 4 | 5 | 3 | 3 | 3. 8 |
| 成果の発信と実用化促進 | 2 | 3 | 4 | 3 | 4 | 3. 2 |
| 技術支援 | 4 | 5 | 4 | 1 | 3 | 3. 4 |
| 人材の育成・確保 | 3 | 2 | 3 | 1 | 2 | 2. 2 |

| | | | | |
|------|---|--------------|---|-----------|
| 点数基準 | 1 | 全面的に見直すべきである | 2 | 見直すべき点がある |
| | 3 | ほぼ適切である | 4 | 優れている |
| | 5 | 非常に優れている | | |

6 外部評価意見・指摘事項

(1) 研究課題の設定

- ・外部資金の獲得・大型プロジェクトの実施と、業界ニーズへの対応が両立するように良く設定されている。
- ・少ない職員では良くまとめてやっておられると評価したい。
- ・業界団体、企業との情報交換や技術相談・指導などにより研究ニーズを把握し、「新産業育成」、「既存製品の高付加価値化」、「新技術導入による技術高度化」に集約し、「岐阜科学技術振興プラン」にてらし、研究計画が立てられている。公設研究所としてのこの課題設定の方法はこれまで通りの方法論であり、特に問題はないと思われる。
- ・研究員の数からすると課題設定数が多いと思われる。少ない職員数で地場産業からの生の声を聴くことは大変な作業のため、地場の市の研究機関とオーバーラップする部分もあるので、各ミッションを互いに確認され情報共有するなど上手く連携されると良いと思う。また、地域の銀行等も地場産業の声をひろうシステムがあるので、課題設定等の情報源として使われると良いと思う。
- ・斜陽な陶磁器産業において、この課題設定の仕方ではセラミックスからセラミックスへの研究の範疇となり、単に現状の会社の延命研究となりかねない。地場産業の活性化と言う意味では、セラミックス発で現状の陶磁器産業の枠を超えられるような課題設定の方法論について検討すると良いと思う。その為に、セラミックス関連だけでなく、広い分野での学協会への所員の派遣などを積極的に行い情報収集されることが望まれる。
- ・企業ニーズの探求を企業と一緒に進めて欲しい。
- ・この地域では何が一番困っているのかを把握してもらって、研究開発をやって頂きたい。例えば、今は燃料代の節減に困っているが、この地域しかできないような燃料を考えるくらいの新しいことをやってほしい。
- ・日本一の木節粘土と言われている小名田木節が閉山され、業界全体の粘土の確保が困難な状況になっている。閉山に伴い3年程度使用できる粘土は、一応確保されたものの、以後の対応が心配されるので、代替原料、未利用原料の評価・活用に絞り込んだ研究をお願いしたい。
- ・産業界のニーズに応えるものになっているかという点では、まだまだ調査し、現状把握をした後、問題発見をして提起してともに解決してゆきたいと考えている。

(2) 研究体制について

- ・研究所の規模に比べて、十分な体制であると評価する。
- ・研究プロジェクトに絡んで、企業や大学との共同研究や連携が進んでおり、理想的な展開と思われる。
- ・職員13名でこの施設面積、機械があつて、技術相談だけでも、ざっと計算ただけで一日1件以上で、この人数では大変だと思う。選択と集中で運営しておられると思った。
- ・日頃から多くの公設研究所と付き合いがあるが、セラミックス研究所は窯業関係の研究所の中で日本では1, 2番の活動をしていると思う。そういった点で、今のやり方で良いしこれからも頑張っていたきたい。
- ・大型予算である地域イノベーションプログラムのグローバル型、都市エリア型に参加しており、プロジェクト全般の目的の中で、研究所の得意とする課題を分担されているよ

うに見受けられる。プロジェクトには近隣の大学、研究機関、地域企業が参加しており、このなかでの担当課題の設定、参画機関との連携状況は良好に思える。一方で、研究体制と言う意味では、これだけの大型プロジェクトを遂行するには担当職員の人数が少ないと思われる。臨時研究員の雇い入れ等がどの程度なされたか評価資料から分かるが良い。

- ・共同研究および受託研究も県内企業を中心に、大学等適切な機関と組んで実利的に推進していると思われる。これは企業の申し入れベースなので分野のバランスということならば、申し入れ内容に対してどのように取捨選択したかを示して頂かないとバランスが良い悪いは評価できない。評価の設定項目の再考が必要だと思われる。
- ・プロジェクト型研究が多いので、研究員に自由な研究を行う余裕が少ないのではないかと懸念される。
- ・外部資金は将来役に立つような技術の研究で、将来役に立つ新しい研究と今役に立つ仕事のバランスが難しいが、外部資金を意識してしまうと、地元の企業から見ると、何をやっているのか分からない研究になってしまう。今、大型プロジェクトが終わったところなので、もう一度、企業に密着し、そこから応用するような体制に転換することを考えても良いのではないか。
- ・内容の濃い事を色々とおられるには感心した。この状況を各窯業団体（事務局等）へファックスで良いので配信してほしい。
- ・今、セラ研がやっていることの成果がでるのは何十年か先だと思うので、それを今評価することは難しいが、技術の蓄積をしてきたことは、企業の人と一緒に研究をやることが一番大事だと感じる。研修でもなく、共同研究でもない中間のような制度があったら良いと思っている。
- ・地元が開かれた研究所であるかどうかということに関して、やっていることは素晴らしいが、そういうPRができていないと思う。
- ・研究員の全てにやれと言うのは難しいが、数人が企業を回って一緒にお酒を飲んで話ができるような人間も必要だと思う。ただ、県はそういったことにがんじがらめになっていて、非常に厳しいので、何か現状を打破してもらわないと難しいかとも思う。
- ・前から産学官連携をやりたいと思っているが、大学を回り、産地を繋げるという仕事も研究所として重要な役割になってくるのではないか。
- ・中国でも付加価値を高めることを考えているので、今後は日本も安心していられない状況になると思われる。これからは、一番大切なことはデザインであり、中国には自分がお金をだして買いたいと思う製品はないが、それが日本でできるかが課題。この研究所にもデザイナーがいるが、太刀打ちできるかどうか考えた時、思い切って考え方を変えないとやっていけないと思った。

（3）成果の発信と実用化促進

【特許等】

- ・多くの特許が取得、実施されており優秀な成績と思われる。
- ・一般的な評価で言えば、出願数、実施許諾の件数は、極めて低水準だと思う。ただし、地場産業のことを考えると、特許保持がそのまま地場産業の活性化につながると思えない。また、研究技術が工業所有権を得ることに向いていないとも思える。従って、厳

選された新技術のみ精選し特許化されているとみれば、妥当な数字だと思われる。

- ・最低年1回程度の特許、実用新案の申請は不可欠と思われる。

【特許等にしていない技術・新製品】

- ・毎年2件程度の特許等にしていない技術・新製品が生まれている。現状でも良い水準だと思うが、この点は公設試験機関の最も大切にされるべき内容の一つだと思う。一層の注力を期待する。
- ・窯業分野では特許化し難い多くのノウハウが発生するので、特許以外の知財の確保の制度化が必要と思われる。

【学術論文・学会発表・報道発表等】

- ・論文が公設試の使命ではないので妥当な量だと思われる。学会発表に比較して学術論文の数が少ないと思う。
- ・成果数がインパクトと関係すると考えると、年度ごとに適切な量のプレスリリースがされていて大変良いと思う。
- ・成果の地元業界への発信について、外部評価資料では状況が十分把握できなかったがもし少ないのであれば、積極的なPRが必要である。

【全般】

- ・結構先進的な内容に取り組んでみえる事に感心した。日本のトップリーダーとしての自覚を持ち続けてやっていってほしいと思う。
- ・ニューセラミックスやファインセラミックスに関する情報や仕事は愛知県から岐阜県で途切れてしまう傾向にあるが、岐阜県がファインも含めてセラミックスの情報発信基地になってほしい。

(4) 技術支援

【指導・相談の件数】

- ・各年度2000件程度の件数が有り、景気等にも左右されず地域内企業から必要とされている指導・相談を行っていることが伺え、高く評価したい。
- ・依頼試験は、業界支援として十分な機能を果たしている。また、技術相談・依頼試験に取り組む姿勢も評価される。
- ・統計を示す時に工夫をされると良い。職員によって得意とする専門が違うと思うので、例えば原材料の相談に対し、A氏とB氏が担当。一人平均X件といった情報を整理されることが必要だと思う。そうすれば件数だけでなく地元企業の相談内容（要望）量に対し、対応職員数がわかり、地元要望の分野をカバーできている職員がいるかがわかる。また、現状の人員で十分対応できているかが判断できる。足りない場合には、地元の要望に対応する専門性のある職員を採用配置するのか、対応できない部分は大学や近隣研究所との連携で対応するのかなど技術支援の改善根拠資料となると思われる。
- ・「指導・相談」は指導と相談なのか一体となった指導相談（技術相談に指導が含まれているのか）なのか、統計的に区別できない内容なら、指導・相談ではなく指導相談あるいは別の文言の方が適切かと思う。

【指導・相談の具体的な成果】

- ・評価書類ではコーディネイトのみが書かれているが、プレゼンでは他にも沢山あったと思う。簡単でよいのでなるべく書くべき。

【依頼調査の件数】

- ・年平均2500前後の依頼がある。これも指導・相談同様に景気等にそれほど影響されず一定のニーズがあり、地元企業が研究所を頼りにしていることがうかがえる。

【技術講習会】

- ・長期および短期講習が適度なバランスで開催されている。講習会名からは地元企業の要望により開催されているだろうことが伺える。出席者も多く、地域にとって良い講習会であったと言える。一方で、評価書のデータとしては地元の要望による企画なのか研究所が現在・今後の地場産業の進むべき道を示すあるいは考えさせるための講演企画なのかを明確にされた方が良い。
- ・講習会や研修会は、地元企業との大きな接点となるので、頻繁に開催することが良いと思われる。近隣に複数の機関があるので、共同開催も有効と思われる。
- ・研修会、研究会の講師選定に関しても異業種から招へいして勉強することが大切である。陶磁器はもはや単体で考えるのではなく家具に合っているか？生活シーンでどのように使われているのか？どんなデザインの流行か？等の観点が必要で、講師の例として、料理研究家（女性）や博報堂、電通等の時代の先読みができる人に、これからの暮らしがどうなるのか講演してもらおう等を考えるべき。
- ・技術講習会は、ろくろ、成型技術、絵付・焼成技術、施釉等伝統技術の継承をしないと産地が滅びていく。技術者としての高齢者を探し出し、ものづくりが好きで産地に定着しそうな若い人達に継承、植え付けていくことが大切ではないか。

【全般】

- ・広範囲に良く取組んでやっている。特に親しみを感じる事は、開放試験をやっておられる事である。

(5) 人材の育成・確保

【研究員の育成体制】

- ・内外の大学、企業機関に是非派遣され、外から地場産業や研究所について俯瞰的に見ることは大切だと思われる。たとえば地場製品の引き合いに中国製品がだされるが、実地で見てみることも技術支援や研究遂行に大切な知見が得られると思う。人員の問題で日常業務が大変で有ることは評価書類からも分かるが、一年一人でもよいので、ミッションをもって派遣研修を実施されることをお勧めする。プロジェクト研究も必要であるがそちらを一休みしてでも実施されることをお勧めする。
- ・人材育成制度の対応は適切と思われるが、企業と一緒に活動したり現場を見ることによって養われる知識や経験が重要であるので、そのような活動にも配慮してほしい。
- ・産地の疲弊した現状をどの程度把握してもらえるか、それは、研究所には分からない研究員が現場で社長や社員とあいまみえてもらって、そこからこれからのセラミックス研究所があるのではないか。そのためには、職員を各企業へ派遣して、その企業の問題点を提起し、指導し、解決することが必要。実験的に2、3社窯元で試してみてもどうか。

【外部研究員・研修生受け入れ実績】

- ・毎年20人前後の受け入れがあるので、一定の受け入れ要望があることがわかる。これは研究所の本制度が必要とされているということであり、評価できる。研修生、インターンシップの研修内容について適切かどうかは、本書類だけでは判断しかねる。ただし、タイトルから考えるに適切だとは思われる。

- ・企業からの研修生の受入れなど、地元業界の人材育成は特に重要である。業界の経済状況が良好でないと、企業が社員を研修に出す余裕が無いと思われるので、企業の本業業務に役立つ形で、柔軟に人材を受け入れたり、業界の技術水準の向上に貢献することが有効と思われる。
- ・企業に対して積極的に派遣受入れのPRを実施していくと良い。その為に、一つの方法として、各窯業団体（組合等）への情報発信をして欲しい。

【出前講座】

- ・毎年一定の依頼がある。これは研究所がこれまで積み上げてきた研究成果が認められたことだと思う。講義できるタイトル等をデータベース化あるいはHPからみられる様にすれば、さらに多くの要望がよせられるだろうと思う。
- ・出前講義ではなく、3～6カ月程度企業に職員を派遣して、何が一番困っているのかから探ることが必要。

【全般】

- ・人材バンク（伝統技術者：鋳込み・ロクロ・成型・素焼・焼成）の構築と利用（ハローワーク又は東濃可児雇用開発協会と組んで就職説明会に参加して第一歩を踏み出す）県に補助金要請していく。
- ・今やられている染付教室は、実業で生かされていることもあるし、伝統的な技術を若い人達に伝えるべきだと思うので、こういう事業をどんどんやってほしい。

（6）その他

【研究者の構成】

- ・研究者13名に対し大変多くの内容が実施されている。特にプロジェクト研究は大変だっただろうと想像できる。一方で、本来業務がおろそかになってはいないか心配になる。プロジェクト研究も無駄ではないが、やはり技術支援を中心に種々の展開を考えられた方が良さだろうと思う。
- ・業界全体の要求を整理し、人員が少ない分は近隣公設試との棲み分けと連携、近隣大学との連携などで凌ぐことが、今後ますます必要になるとと思われる。

【施設】

- ・セラミックスの製造に必要な設備がそろっており、日本国内の同様な施設の中でも充実している。しかしながら、老朽化も目立った。この先、リプレスを計画的にし、順次、設備の更新をすべきである。
- ・各研究棟が古く、汚れているので、外側だけでも、塗装を塗り直してはどうか（楽しくなるようなカラーにしてみるのもよい。また、自分達で出来る所を塗れば愛着が湧く）

【運営の効率化】

- ・技術の研究開発は、運営の効率ができる内容ではない。研究開発は多くの人が取組み、そのうちの 하나가成功するかどうかと言った確率が当たり前である。無駄失敗なくして成功はない。したがって、無駄失敗ができる研究開発体制の構築が必要である。効率化できるとすれば、隣接公設試との棲み分けと連携、近隣大学との連携だと思う。また、プロジェクト研究を極力減らすことである。

【全般】

- ・過去7年間、研究職員の数が減少を続けており、現状を維持するだけでも危機的状況があると危惧する。

- ・今の時世を考えると予算以上状況等大変厳しいものがあるが、こういう時こそ変化する事だと思う。過去にとらわれずに、民の力をもっと利用されると良いと思う。その第一歩として、セラミックス研究所から各組合等へ、どんな情報でも構わないので流してほしい。
- ・瑞浪窯業技術研究所、セラテクノ土岐、セラミックス研究所の3所が連携を深め、各地の研究所が、例えば加飾、施釉、焼成等に特化することが必要ではないか。
- ・大型プロジェクトが終わった今、お金がないならないで、原点に戻って、研究所のあり方をゆっくり考えてほしい。非常に大切な研究所で、公設試では全国で第一位だと思っているし、岐阜県がやらなければ何処がやるのかと思うので、継続してやってほしい。

7 外部評価結果に対する研究所・所管課・研究開発課の対応・意見

(1) 研究課題の設定

- ・平成11年度に多治見市、土岐市、瑞浪市の試験研究機関とともに東濃四試験研究機関協議会を設置し、密に情報交換を行ってきた。業界全体に大きく影響する課題(例えば、食品衛生法の改正など)に対しては、四試験研究機関が連携して対応してきた。また、国のプロジェクト研究では、各研究機関がそれぞれの得意技術を活かした課題設定を行い、分担して研究を行ってきた。今後も、市の研究機関との連携を密にし、効率的に業界支援できるよう役割分担に努めていく。
- ・平成23年より、研究機関は所管する各部に移されたが、研究方針の設定、研究費の配分等の研究開発の推進に関わる運営は研究開発課で一元管理されており、年に3~4回の研究機関所属長会議及び研究部長会議を実施する中で、工業部門のみならず農林水産部門まで含めた各部門の研究所での情報交換を密にし、分野を越えた横断的な研究課題の設定に努めているところである。今後は、産学官連携も含めた積極的な異業種交流に努めていきたい。
- ・企業との連携については、一定の成果が出た段階で幅広く広報し、共同研究や受託研究につながるよう努めている。
- ・今まで以上に、企業訪問や技術相談等の来場者による情報収集、および業界団体の会議における要望や業界動向調査を行い、的確に業界ニーズを把握するように努める。
- ・陶磁器の代替原料に関しては、平成25年度より重点研究課題「陶磁器原料の調査と代替原料の探索」において、窯業原料鉱山の稼働状況や輸入原料の調査、および成分分析や調合試験等による代替原料の評価を実施する予定である。この研究は、岐阜県窯業原料協同組合と連携して行うことを考えている。

(2) 研究体制について

- ・評価の設定項目については、分野バランスが分かりやすいように資料の様式を修正するよう検討していきたい
- ・本年度で大型プロジェクト研究は終了し、来年度は県費による地域密着型の研究が主体となるため、実際の研究に多くの時間を割くことができるようになる。
- ・来年度は外部資金による大型プロジェクトがないため、今以上に業界動向(ニーズ)調査に努め、長期的、短期的視野に立った課題の抽出を行う。短期的課題に対しては、企業

を組み込んだ体制で実施する。

- ・ 研究報告書や情報誌を各組合に配布、研究成果発表会や講演会等の案内は各組合にファックス配信、成果等は研究所のHP掲載や新聞報道等、今まで以上に情報を業界に発信していく。
- ・ 現在も、複数の企業から要望がある共通のテーマについての研究会活動や、巡回技術支援で得た課題を企業とともに解決するような活動を、共同研究ではなくても企業と一緒にしている。このような活動を、積極的に進めていきたい。
- ・ 企業訪問や業界団体等への出前講演、成果説明、情報誌によるPRなどを通じて、さらに開かれた研究所として業界に活用されるよう努めていく。
- ・ 人と人の繋がりが大切であり、企業訪問や依頼試験・技術相談での面談を通して、気楽に往来できる関係づくりをしていきたい。
- ・ 産学官連携をコーディネートする役割は、研究所及び研究開発課の重要な仕事と認識しており、日頃より（財）岐阜県研究開発財団、（財）岐阜県産業経済振興センター及び岐阜大学研究推進・社会連携機構等と定期的な会合を実施し、情報収集に努めている。また、岐阜大学を始めとした近隣大学へは、有識者ヒアリング、企業ニーズ調査を実施し、情報収集に努めている。このようにして得た情報を、業界に紹介するように努める。

（3）成果の発信と実用化促進

【特許等】

- ・ 特許申請には多大な費用がかかり、近年の県財政状況が厳しい中、実用性があり、許諾収入が見込める特許のみしか認められず、県の各研究所（10 研究所）から出される状況を考えると、年1件の申請は困難であると考えられる。

【特許にしていない技術・新製品】

- ・ 企業との共同研究で得られる技術的ノウハウは秘密保持契約を締結する等で、秘密保持に努めている。今後はノウハウ指定等の方策も検討していきたい。

【学術論文・学会発表・報道発表等】

- ・ 最近では実用研究が多く学術論文にしづらい面があるが、研究成果がまとまれば学術論文として成果をPRしていく。
- ・ 研究報告書や情報誌を各組合に配布、研究成果発表会や講演会等の案内は各組合にファックスの配信、研究所のHP掲載や新聞報道等、今まで以上に情報を業界に発信していく。

【全般】

- ・ 愛知県の瀬戸地区はファインセラミックスや工業用セラミックス関連の企業が多くあり、情報が集まるのは否めない。しかし、当所ではファインセラミックスの課題も設定しており、ファインセラミックスに関する技術相談も多くある。収集したファインセラミックスの技術情報等は、できる限り業界に発信するよう努める。

（4）技術支援

【指導・相談の件数】

- ・ 職員毎に相談内容について業種別、相談内容別に統計を行っているが、より細部に渡る分析を行うようにする。

- ・技術相談に指導が含まれており、指導と相談の区別はできないので、評価資料の「指導・相談」を「指導相談」に変更する。

【技術講習会】

- ・東濃四試験研究機関協議会で情報交換を密にして、研究成果発表会、講演会を効率的に行っていく。
- ・研修会・研究会の講師の選定には異業種からも招聘するようにする。
- ・中小技術者研修ではロクロ成形の研修を、デザイン協議会と共催で染付研修を行っており、今後も継続して技術の伝承を目的とする研修を行っていききたい。

(5) 人材の育成・確保

【研究員の育成体制】

- ・研究員の派遣研修については、予算の減少により、どの研究所でも減っているのが現状である。そのため、平成25年度より、大学や独立行政法人研究所等で新規技術習得、情報収集・情報交換を目的とした中長期研修への参加のための経費を研究開発課で「研究人材育成事業」として予算化し、若手・中堅研究員の資質向上を図る予定である。
- ・過去には、人材育成事業の一環として、企業研修を実施していたこともあったが、人員削減された現在の職員数では、長期研修・長期派遣による職務からの長期離脱は、困難な状況になっている。しかしながら、企業の現状を知ること、及び現場から得られる知識、経験の重要性は認識しているので、定期的な企業訪問ができるような体制の構築を検討し、積極的な情報収集に努めていきたい。

【外部研究員・研修生受け入れ実績】

- ・現在、研修生の受け入れについてはカリキュラムを組んで1年間の長期に渡って教えるのではなく、各自の課題(例えば、マット釉の調合など)に対して短期間での研修を行う方式であり、研修生の時間的制約に対して配慮し、柔軟に対応している。その他、染め付けなどの実技研修や技術講演会を通して地元業界の人材育成に努めていきたい。
- ・研修生の受け入れ制度を情報誌に掲載し、各組合に配布、HPへの掲載等、業界に発信していく

【出前講座】

- ・企業や業界団体等に出向いて講義する出前講座があることを、HPに掲載するなどしてPRに努める。

【全般】

- ・企業や組合等の訪問時を利用して、伝統技術者の情報収集に努める。
- ・染め付け研修は、来年度も岐阜県陶磁器デザイン協議会との共催で実施する予定である。

(6) その他

【研究者の構成】

- ・研究によって蓄積された技術(知識)によって、技術相談等に対処できるようになるためには研究開発と技術支援は当所の両輪である。しかし、来年度は国のプロジェクト研究がないため、新たな研究会の立ち上げや実技研修などの技術支援を充実させていきたい。
- ・東濃の公設試とは東濃四試験研究機関協議会、名古屋工業大学先進セラミックス研究セ

ンターとは連携協定、東海・北陸の公設試とは産業技術連携推進会議東海・北陸地域部会セラミックス分科会などによって、常に情報交換を行い、それぞれの得意技術や保有機器の把握に努めている。当所では対応できない技術相談等は、迅速に他を紹介することを心掛けている。

【施設】

- ・研究機器の更新は、研究開発課の研究開発機器等設備整備充実費の予算の中で対応しており、毎年、各研究所より提出される5ヵ年の整備計画及び優先順位に基づいて実施している。必要性、老朽化などに配慮して整備しているが、県内のほとんどの研究所で施設の老朽化が進んでおり、限られた予算の中での整備なので、希望の年次に整備できるとは限らず、機器の更新は遅れ気味となっているのが現状である。
- ・研究棟の外壁も含め、老朽化が進んでいるので、所内の優先順位をつけ、限られた予算の中で計画的に補修を進めていきたい。

【運営の効率化】

- ・平成25年度より大型プロジェクトが全てなくなり、書類作り等が軽減されるのでじっくり研究に取り組んでいきたい。

【全般】

- ・研究員の不足については十分認識しているが、厳しい県財政の中、行財政改革アクションプランにより平成21～24年度の期間は県の全ての機関において削減されており、厳しい状況となっている。アクションプランが解除される平成25年度以降は研究員の維持・確保に向けて、検討していきたい。
- ・情報誌やFAXにより、講演会、講習会、補助事業説明会などの情報を積極的に配信していきたい。
- ・陶磁器は原料から焼成まで多くの工程がある。各工程がお互いに影響し合うため、少なからず全工程の技術知識を持つ必要がある。ある程度の得意分野の棲み分けは必要であるが、極端な技術の特化は研究所の陶磁器技術の減退に繋がる恐れがある。